

# 逸脱行為と下位文化

関西大学非常勤 玉井真理子

## 1.はじめに

周知のようにショウの諸研究は、文化学習理論の古典に位置づけられてきた。文化学習理論に基づく諸々の逸脱研究は、子どもが非行集団に準拠し、法に背く行為を習慣化することにより、やがては逸脱者となりゆく側面を明らかにしてきた。だが、なぜ・いかに子どもが非行集団と接触し、その集団の一員となるのか、さらに司法制度による負のサンクションを受けてもなお非行を深化させるのか等、非行への推進力に関する説明は必ずしも充分になされてこなかった。

本報告の目的は、近年注目を集めている感情社会学の原点が初期シカゴ学派にあることをふまえた上で、特にショウの『ジャック・ローラー』を素材とし、非行少年たちの逸脱的行為選択を促すあるまとまりを持った感情が、下位文化に属する他者、あるいは上位文化に属する他者との相互作用を通してもたらされることを分析することにある。

## 2. 初期シカゴ学派における感情と行為

感情に注目し、行為との関連性を重視するアプローチは、初期シカゴ学派の伝統である。ショウをはじめとする第三世代を育てた先人達は、それぞれにエモーション、フィーリングという単語を用いて、感情と行為について論じているが、ここでは本報告の関心に基づき、ショウの非行下位文化論に繋がる系譜として、とくにこの学派の第一世代、第二世代を代表するトーマス、パークをとりあげておく。

よく知られるトーマスの「状況の定義」(Thomas 1928)は、人の感情的行為を説得的に示したものである。この定義でトーマスが例に挙げるのは、感情に基づいて殺害に及んでいたダモンネラ刑務所の受刑者である。この受刑者は独り言をいう癖のある人を何人も殺していたのだが、その動機は独り言をいう口の動きから自分を蔑んでいると思ひ込み、その感情的反作用として逸脱行為に及ぶのであった。すなわちこの受刑者は自尊心を傷つけられた報復として殺害に及ぶことを

示している。

他方パークは、都市そのものを「感情の集合体」と述べた(Park 1916)。パークによれば、都市はそこに暮らす人々の生活過程によって動的に構成されるが、人々を動かす要因は経済的利害や偏見などへの関心といった感情である。パークが都市を「実験室」といったのも、「小さなコミュニティでは通常曖昧にされ、抑圧されて見えなくなっている人間の全ての性格や特質というものが、都市においては公衆の面前に押し出され、赤裸々にさらけ出す傾向」(ibid.)があり、それゆえ「人間性や社会過程を巧みに、また有効に研究できる」(ibid.)と考えたからであった。

第三世代のショウが「少年自身が書いた物語」に注目したのは、感情と行為との関連を重視したからに他ならない。ショウは個人的な記録においてこそ、「劣等感や優越感、恐れや心配、理想や人生哲学、敵意や精神的葛藤、偏見」が明らかにされると述べている(Shaw 1930)。

## 3. 「下位文化」における感情的行為としての逸脱

『ジャック・ローラー』において自身の物語を書いたスタンレー少年が非行下位文化に属する主たる条件として、1. 崩壊家庭、2. 兄を介して出会う非行集団、3. 公的機関の懲罰による逆機能を挙げることができる。以下それぞれに検討を行う。

### 3-1 崩壊家庭

家庭の崩壊状態は、子どもを非行に押し出し、推進する力として機能する。大村・宝月が指摘するように、崩壊家庭を「文化的抑止力」をもたない「道徳的真空状態」とみる限りにおいては、非行の可能性を現実化する要素を何一つ解明していない(大村・宝月 1979)。

スタンレー少年の場合には自分に対して家族としての成員の地位を与えない母親と、その現実を自分が母親の継子であるからだという解釈を与えて受け止める少年との間で生じた「反目」が、

家庭の状況を象徴している。少年は母親に憎悪をつのらせてゆき、その結果として少年の逸脱行為一万引き、常習的家出ーが引き起こされる。これらの行為には、継母との関係において、次の動機の語彙が与えられる。前者は空腹をまぎらすため、後者は継母の暴力から逃れるためである。

### 3-2 非行集団

G.H.ミードのいうゲーム段階を、非行多発地域の子どもたちはミードが例にあげたような「野球」ではなく「チームを組んでの窃盗」等に参加することで経過する。とりわけ崩壊家庭の子どもたちは、その集団の慣習的行為が逸脱的であるとわかっている、この子ども集団にひきつけられやすいといえるが、その主たる理由として次の二つを指摘することができる。

第一は、家庭内では得られない「正規の構成員」の座を、子ども集団において得ることができる点である。子どもたちは家庭で冷遇されればされるほど、憎悪や恐怖から家族の目の届かぬ空間を求め、正規の一員であるという自己意識を持つことのできる者達と仲間関係を築こうとするのである。

第二は、家庭では見出すことのできないパースペクティブを集団が与えてくれるという点である。ここでいうパースペクティブとはシブタニのいう、その人の世界に対するある秩序づけられたものの見方である (Shibutani 1955)。とくに親が不和・葛藤の元凶となっているような家庭では、親が子どもに何らかのパースペクティブを与えることは困難である。シブタニがパースペクティブの共有の前提として重視する「心安さ」が、親との関係において成立しないからである。

### 3-3 公的機関による懲罰の逆機能

少年は逮捕・収監などの罰を受けることにより、それまで否定的な意味をもたなかったばかりか、むしろ「遊び」や「勝負」、「仕事」として肯定的な意味づけを仲間内で与えてきた逸脱行為一万引き、飲酒、かっぱらい等が、重大な負のサンクションを被る行為であることをしらされる。だが公的機関による懲罰は、根本的な道徳的意味内

容の転換をもたらさないばかりか、むしろ行為主体の更生に逆機能することがスタンレーの物語からわかる。特に教護院や感化院での厳格な行為統制は、収容者たちにある明確な感情を呼び起こす。ここでは以下の3点を示すが、それらは「犯罪者」のラベリングを受容する一連の過程で呼び起こされる感情とみることができる。

第一は役人・看守への憎悪である。収容者に慢性的な精神的葛藤を強いるのは、彼らの閉ざされた空間を支配する役人や看守である。仲間を密告しないことや、ただの「こそ泥」と少年を見下して不当な制裁を与える彼らに、少年は憎悪をふくらませてゆく。従って役人や看守が、価値規範や道徳を共有する他者になることはない。

第二は密告者 (タレコミ) に対する軽蔑である。密告者に対する軽蔑は、仲間を売るような汚い背徳行為をしないという点において、自分たちは密告者より優れているのだという自尊心と表裏をなす感情である。これはアンダーワールドに忠誠心を持つことをよりどころとして、主体性を回復し、自らのアイデンティティを防御しようとする試みに必然的に伴う感情といえよう。

第三はより「大物」の犯罪者になろうとする志である。少年は収容所における他の犯罪者との接触を通して、アンダーワールドの社会階梯における「大物」への地位移行の仕方を学習する。何度も収容されるうちに、年下の犯罪者から畏れられる術を獲得し、自尊心を煽られる感情から、アンダーワールドにおける成功を目指すようになるのである。

## 4. おわりに

逸脱主体が書いたライフヒストリー分析を通して、葛藤や快楽といった感情が、逸脱行為を動機付け、深化させること、すなわち感情が行為を方向づける重要な因子として働く点を具体的に示した。この感情的応答のパターンは、これまでみてきたように、社会化過程のなかで全体として合理的に説明できるものになり、またそれは文化的環境を色濃く反映する。この点を考慮しなければ、矯正教育は逆に機能することにもなりかねない。(参考文献は、発表レジュメに明記いたします。)